創建期長谷寺の十一面観音像に関する覚書

岩佐光晴

はじめに

奈良県桜井市に所在する長谷寺は古来観音霊場として知られ、多くの信仰を集めてきた。その本尊である十一面観音菩薩立像（図1）は像高が十メートルを超える巨大な木彫像で、現在の像は、天文五年（一五三六）の火災を経て、同七年に再興された像である。

『扶桑略記』によると、長谷寺は神亀四年（七二七）三月三十日に供養され、本尊の十一面観音像は木造で、像高は二丈六尺であったことが知られる。[1] 長谷寺はその後、天慶七年（九四四）、永承七年（一〇五二）、嘉保元年（一〇九四）、建保七年（一二一九）、弘安三年（一二八〇）、明応四年（一四九五）、天文五年（一五三六）の計七度焼失したが、その度に、造立当初の二丈六尺という像高を継承しながら再興されるという注目すべき歴史をもつ。[2] 現在の本尊は、創建以来、八度目の造像ということになり、十メートルを超えるその巨大な姿は、当初像

の面影を投影しているともいえるのである。

しかし、神亀四年の時点で、像高が二丈六尺に及ぶ木彫像が造立されていたとすると、これまでの日本彫刻史の理解をはるかに超えた内容をもつと言わざるを得ない。まず、十一世紀に寄木造りの技法が確立される以前に、これだけの規模の木彫像の造立が可能であったのかという疑問を持たざるを得ない。七・八世紀の現存する木彫像を見ても、七世紀では像高が二メートル十センチの法隆寺・百済観音立像、八世紀では像高が二メートル五十二センチの安祥寺・十一面観音菩薩立像が比較的大きく、大半が二メートル以下である。こうしたことから、長谷寺の当初像については、日本彫刻史の枠外に置かれ、それがそもそも実在したのかも含めてほとんど議論されてこなかったといってよいだろう。

筆者は以前、長谷寺の当初像を造立したと伝える稽文会・稽主勲という仏師の実在性について検討し、実在した可能性が高いことを指摘したことがあるが[3]、本稿では当初像そのものについて検討し、その史実性も含めて、関連する問題について考察を試みたい。

一、史実性に関する検討

創建当初の長谷寺に二丈六尺の木彫像が実際に存在していたかについては、必ずしもきっちり検証されているとはいえないように思われる。まず、その点を確認しておきたい。

長谷寺の縁起を記す文献として、現状もっとも古く遡るのが、永観二年（九八四）に源為憲（？～一〇一一）

によって書かれた『三宝絵』所収の「長谷寺菩薩戒」に見られるものである。[4] ここでは、明確に二丈六尺の像と記している。長谷寺は天慶七年（九四四）に火災に遭い、仏像も焼失したことが知られる。『日本紀略』では、焼失した仏像を「験仏」と記しているので、[5] 本尊の十一面観音像を示していると見てよいだろう。その後、同九年には再興されたことが知られるが、[6] 本尊も造立されたかどうかは不明である。しかし、『三宝絵』が書かれた永観二年には二丈六尺の規模で再興されていたと考えるのが自然であろう。やはり、像の存在があって、はじめてそこに語られる縁起が生きてくると思われるからである。

そうした点を考える上で興味深いのが藤原資房（一〇〇七～五七）の日記『春記』の記事である。長谷寺は永承七年（一〇五二）八月二十五日に二度目の火災に遭い、本尊も焼失するが、『春記』の同年八月二十八日条によると、この前の火災の時には、十一面の頭を取り出すことができ、再興した体部に取り付けたことが知られる。[7] また、同書同年九月七日条によると、今回も焼け跡の灰の中から、左辺の瞋怒面一面、右辺の狗牙上出面一面、頂上仏面一面の計三面が発見され、いずれも皆金色であったという。[8] この火災時の再興供養は天喜二年（一〇五四）八月十一日に行われたが、[9]『長谷寺焼失』という記録には、この時の再興造像について詳しく記されている。それによると、十一面観音像を元のように二丈六尺で造り、焼け跡から取り出された頂上仏面や小面は体内に納められたことが知られる。[10]

以上からすると、永承七年に焼失した天慶七年火災の再興像も二丈六尺であったことがわかる。天慶七年の火災時に取り出された頭部が本面そのものであったか頭上面であったかは定かではないが、二丈六尺規模で再興された像に見合う大きさだったと考えられるので、天慶七年の火災で焼失した根本像も二丈六尺の大きさであったと考えるのが妥当であろう。

なお、永承七年の火災時に焼け跡から取り出された頭上面は再興像の体内に納められたのに対して、天慶七年の火災時に取り出された頭部が再興像の体部に取り付けられたことは興味深い。つまり、永承の火災の再興像は像内に大きく内刳りが施されていた状況が推定されることから寄木造りで造られ、天慶の火災時の再興像は一木造りであったことを示唆しているように思われるからである。これは、永承の頃には寄木造りの技法が確立されており、天慶の頃は、まだ一木造りの像が主流であった状況を反映しているともいえよう。

このように、史料を読み込むことによって、長谷寺の創建期の八世紀前半に二丈六尺規模の木彫像が実際に造立され存在していた状況が浮かび上がってくるといえる。

長谷寺の名が正史に初めて登場するのは、『続日本紀』神護景雲二年（七六八）十月二十日条で、称徳天皇が長谷寺に行幸し、田八町を寄進したという記事である。[11] また、延暦六年（七八七）に原形が成立し、弘仁年間（八一〇～八二四）に現在ある形になったと考えられている[12]『日本霊異記』下巻第三縁には孝謙天皇（称徳天皇）の時代のこととして、大安寺の僧弁宗が長谷寺の十一面観音像に祈ることによって借金を返済できたという話が載せられている。[13] さらに『続日本後紀』承和十四年（八四七）十二月二十一日条によると、長谷寺は霊験のある寺として、壺阪寺とともに定額寺となったことが知られる。[14]

つまり、長谷寺は八世紀前半に創建され、八世紀後半には天皇が行幸をする寺院として一定の格式を持ち、十一面観音像はご利益のある像として認識されていたこと、九世紀半ばには霊験寺院として明確に認知されていたことが知られるのである。特にその霊験性は、本尊の十一面観音像に起因するものと考えられ、間接的ながら、当時本尊は存在していたことを示しているといえよう。また、『日本霊異記』の記載によると、弁宗は十一面観音像の手に縄をかけそれを引いて祈ったと語られていることは注目される。つまり、そうした行為をした場合、像

が、ある大きさを伴っていないとすぐに転倒してしまうことを想定すると、像が二丈六尺という巨像であったからこそ可能であったと思われる。

二、縁起の内容に関する検討

長谷寺に関する縁起は様々な形で数多く伝えられており、その系統は複雑であるが、ここでは、その史実性に着目する立場から、できるだけ古い時期に記載されたものについて見ていきたい。[15]

その場合に注目されるのが、『扶桑略記』神亀四年（七二七）三月三十日条の長谷寺供養の記事とともに引用されている二つの縁起である。一つは『縁起文』によるものであり、一つは『為憲記』によるものである。このうちの『為憲記』は前述のように、永観二年（九八四）に源為憲によって書かれた『三宝絵』のことであり、同下巻二十「長谷菩薩戒」に似た内容の縁起が記載されている。ここでは『扶桑略記』に引用された縁起の原本ともいえる『三宝絵』に従って、その内容を示すと以下の通りである。[16]

昔、辛酉年に洪水があり、大木が流出し、近江国高嶋郡三尾崎に流れ着いた。里の人がその端を切り取ると、その人の家が焼けた他、死者が多数出た。その祟りを占うと、この木がなしているとお告げがあったので、人々は近寄らなかった。

時に大和国葛木下郡住人の出雲大満（大水）がこの里に来てこの木のことを聞いて、この木によって十一面観音像を造ることを発願した。しかし、なすすべもなく空しくもとの里に帰った。この後、大満にしばしば霊験が

あったので、わずかばかりの食料を用意して、人を連れてこの木のところへ来た。しかし、木は大きく人数は少なく、空しく見るのみで引き返そうとした。試しに綱を付けて引いてみると、軽く引かれてよく動いた。それを見る人は不思議がって驚き、車を止めて、馬から降りて、力を加えてともに引いた。ついに大和国葛木下郡当麻郷に至った。しかし、物もなく、長くそのままにして、大満は世を去った。

この木は空しく八十余年を経た。その里に病気が流行し、皆こぞって病み傷んだ。郡司や里長はこの木が原因であると言って、大満の子の宮丸にどうにかするように責めたが、宮丸一人では避けることができなかった。郡里の人たちは協力して、戊辰の歳に、磯城の上の長谷河の中にこの木を引き捨てた。そこで三十年が経過した。

ここに沙弥徳道がこのことを聞いて、「この木は必ず霊験があるだろう。十一面観音に造ってさしあげよう」と思って、養老四年（七二〇）に今の長谷寺の峯の上に木を移した。しかし徳道にも力がなく造ることが難しかった。悲しみ嘆いて、七、八年の間、木に向かって「礼拝威力、自然造仏」と言って額ずいた。飯高天皇（元正天皇）が図らずも恩を垂れ、藤原房前が自ら協力した。神亀四年（七二七）に造り終えられた。高さは二丈六尺である。徳道の夢に神が現れ、北の峯を指して言うには、「あそこの土の下に大きな岩がある。掘り顕してこの観音を立てなさい」ということであった。夢が覚めた後に掘るとその岩はあった。広さ長さは等しく八尺である。面が平らなことは掌のようであった。それに像を立てて差し上げた。以上は「徳道、〃明等ガ天平五年ニシルセル、観音ノ縁起幷ニ雑記」等に見えるものである。

『扶桑略記』が引用する『為憲記』[17]と比較すると、ほぼ類似した内容であるが、『為憲記』では、流出した大木は橋の木であるとし、大満の息子の宮丸の話を載せないなど若干の相違がある。『三宝絵』が典拠とした「徳道、〃明等ガ天平五年ニシルセル、観音ノ縁起幷ニ雑記」を「天平五年徳道記縁起」と表記している。

『三宝絵』の縁起では干支による年の表記が二箇所あるが、養老四年から逆算していくと、大木が流出した辛酉は、『扶桑略記』所引の『為憲記』では「辛酉」に「推古九」（推古天皇九年〈六〇一〉と傍記するが、欽明天皇二年（五四一）になる。その後、出雲大満がこの木で十一面観音像の造立を志し、大和国葛木下郡当麻郷にこの木を運んだが、願いを果たすことなく世を去った。それから八十余年を経て、大満の息子の宮丸の代になって、磯城の上の長谷河にこの木を捨てた戊辰の年は天智天皇七年（六六八）と考えられる。従って大満が亡くなったのは、その八十年前とすると崇峻天皇元年（五八八）となり、その辺りが一応の基準になる。天智天皇七年から三十年を経て徳道が十一面観音像の造立を発願したとあるので、その時期は単純に計算すると文武天皇二年（六九八）となる。それを経て、養老四年（七二〇）に今の長谷寺の峯の上に木を移し、神亀四年（七二七）に十一面観音像の造立が完了したということになる。

このように『三宝絵』の縁起の内容は、仏教伝来の頃から一本の巨木が各地を転々と移動しては祟りをなし、奈良時代になって十一面観音像として造られるという話で、かなり説話めいたものになっている。出雲大満が生存していたのは、縁起の内容から言っても六世紀のことであり、その頃にすでに十一面観音の信仰があったということも信じ難い。[18] こうした内容から、なかなか歴史的な事実を汲み取ることは難しく、『三宝絵』が書かれた十世紀後半頃には、長谷寺縁起はかなり説話性の高い内容に変容して伝えられていたと考えられる。

『扶桑略記』には『三宝絵』に基づく『為憲記』とは別に、もう一つ『縁起文』による縁起も記載されているが、その内容は以下の通りである。[19]

長谷寺は俗姓六人部氏の弘福寺僧道明と播磨国揖宝郡人辛矢田部氏の沙弥徳道の二人によって建立された。本尊に使用した木は近江国高嶋郡三尾前山より流出した霹靂木である。至る所で疾疫の災いがあり、人に随って漂

流し、ついに大和国葛木郡神河浦に至った。沙門道明と沙弥徳道はこの木を引いて造仏を企てたが、志はあってもその力がなくもっぱら礼拝に勤めた。ここで正三位行中務卿兼中衛大将の藤原房前が天皇に奏聞し、勅によって大倭国稲三千束が与えられ、像高二丈六尺の十一面観世音菩薩像一体が造立された。像は雷が落ちてできた八尺四方の盤石の上に安置した。仏師稽主勲、稽文会両人の作である。

この『縁起文』は現在伝わる『長谷寺縁起文』を想起させる内容を示している。同書は菅原道真によって寛平八年（八九六）に執筆されたと記されているが、その内容には中世的な要素が散見されるため、実際の成立は十二世紀ないし十三世紀頃と考えられている。[20] しかし、この縁起にはもともと原典があり、時代の推移とともに増補改定されて、最終的に現在の形になったという指摘もされており、[21] この『縁起文』は現在の『長谷寺縁起文』よりも古体を留めるものであった可能性がある。現在の『長谷寺縁起文』の前段によると、「行基菩薩国府記」七巻、「流記文」三巻、「本願聖人上表状」一通を参照し、取捨選択してこの『縁起文』がまとめられた旨が記されている。また、本文の内容には年月日までを明記している個所が多く、何らかの記録に基いて記載されていることが想定され、原『長谷寺縁起文』が存在した可能性は高いと思われる。それが、実際に寛平八年に菅原道真によって書かれたかについては、現状証明はできないが、古記録によってまとめられた原『長谷寺縁起文』が存在し、それが『扶桑略記』に引用された縁起に反映されていると考えてよいと思われる。

以上の縁起のもつ説話的な内容の中から何らかの史実を汲み取ろうとした場合に着目したいのが、長谷寺の当初像の材料となった木がまずあった場所として記される近江国高嶋郡三尾崎とこの木が次に至った場所として記される大和国葛木下郡当麻郷である。これらの場所は、いずれも壬申の乱で激戦があったことでも知られる。

壬申の乱は、天智天皇が亡くなった天武天皇元年（六七二）に、同天皇の弟である大海人皇子と同天皇の子で

ある大友皇子が皇位継承をめぐって争った大規模な内乱である。[22] まず、同年七月四日に大海人皇子軍の将軍の大伴吹負が近江朝廷軍の壱伎史韓国の軍と当麻の地で戦って韓国軍を破っている。[23] また、七月二十二日には、大海人皇子軍の羽田公矢国と出雲臣狛が高島郡三尾崎にあったとみられる近江朝廷側の三尾城を陥落させている。[24] ここに登場する出雲臣狛は縁起に登場する出雲大満と同一の氏族とみられることも留意される。

このように、長谷寺本尊となった木が移動した場所と壬申の乱の戦場となった場所の一部が重なることは、縁起の成立の背景に壬申の乱が何らかの形で影を落としていることが想定されてくる。その場合、木が各地で災いを興したという縁起の話は、木を戦乱に見立てている可能性も考慮してよいように思われてくる。

以上のことを踏まえて、次に造像背景について検討してみたい。

三、造像背景に関する検討

『三宝絵』には具体的に二つの年紀が出てくる。つまり、大木を長谷寺の峯の上に移したという養老四年（七二〇）と十一面観音像の造立が完了したという神亀四年（七二七）である。それぞれの年に、他にどのような出来事があったかを見てみると、養老四年には、八月に藤原不比等が亡くなっていること、[25] 神亀四年には聖武天皇と光明皇后の間に皇子が誕生し、皇太子となっていることが注目される。[26]

壬申の乱は、皇統が天智系から天武系へと転換した事件として位置付けられ、特に天武天皇から草壁皇子を経て聖武天皇に至る皇統の維持には藤原不比等が大きな役割を果たしたといえるのである。[27] 皇統の維持という観点

からすると、不比等の死は当時の皇室に不安感をもたらし、聖武天皇に皇子が誕生したことは、逆に安心感をもたらしたといえよう。

以上のように見てくると、長谷寺縁起の背景には天武系の皇統の維持という要素が読み取れ、十一面観音像の造立意図もその辺りにあったのではないかと推定されてくる。

天平十二年（七四〇）十月から始まる聖武天皇の関東行幸について、その目的の一つに同年に八月に起こった藤原広嗣の乱に対処して「壬申の乱（六七二年）における天武天皇の行跡をたどり権力基盤としての東国の掌握を行い、あわせて壬申の乱で討滅された近江朝廷の跡を志賀山寺（崇福寺）に弔い皇権の正統性を再確認すること」にあったとする指摘[28]があるが、それに似た願いが反映されていた可能性があると思われる。

縁起によると、十一面観音像は徳道の個人的な願いのもとに造立され、それを藤原房前が支援したように記されているが、二丈六尺という巨像であることからすると、国家レベルでの造像であるように思われる。縁起の中では、房前の関与はやや唐突な印象を受けるが、藤原不比等の子である房前が、養老四年（七二〇）の不比等の死に際して、天武天皇の皇統の政治的基盤が弱体化するのを懸念して造像に関与したと考えると理解できる。『三宝絵』ではさらに天武天皇の皇統を継承する元正天皇の関りも記しているが、これも同様であり、むしろ天皇が主体となっての造像ではなかったかとも推定される。

なお、縁起で、十一面観音像の造立に際して、藤原房前が天皇に奏聞し、勅によって大倭国稲三千束が与えられたが、その際の太政官符が護国寺本『諸寺縁起集』所収の『長谷寺縁起』に記載されている。これは従来偽作とされてきたが[29]、近年、これを詳細に分析した田島公氏は、「簡単に「偽作」や「創作」できるものではなく、もともと存在した、実際に発給した太政官符を写し、その一部の表現を分かり易く書き直したものであろう」と述

べている。[30] 田島氏の見解は、古代の文書に関する該博な知識に基づくものであり、極めて説得力があり、造像に元正天皇や房前が関わった可能性は高いと思われる。

さらに、十一面観音として造立された意図についても一定の解釈が可能となる。玄奘訳『十一面神呪心経』の注釈書として、玄奘の弟子筋に当たる慧沼によって書かれた『十一面神呪心経義疏』によると、十一面観音の行法を修する八つの利益の中に国災を除くことがあげられており、唐時代においては護国的な性格が期待されていたことが知られる。[31] そうした点を考慮すると、当初像は国災を除き、皇統を維持することを願っての造像であったのではないかと考えられる。

以上から、創建期長谷寺の十一面観音像の制作背景の輪郭が朧気ながら浮かび上がってくるように思われる。つまり、壬申の乱によって確立された天武系の皇統の維持と安泰を願って、皇室及び藤原氏によって造立されたのではないかということである。そしてその契機としては、養老四年（七二〇）の藤原不比等の死に際してのことであった可能性が高いと思われる。各地で災いをもたらす木に壬申の乱が象徴されているとすれば、戦乱で滅んだ大友皇子をはじめとする近江朝廷の人々や戦死者に対する鎮魂の願いも込められていたとも考えられる。

このように見てくると、創建期長谷寺の十一面観音像は確かに存在し、然るべき背景のもとに造像された可能性が想定されるが、八世紀前半の時点で二丈六尺に及ぶ巨大な木彫像が造立された状況については、なかなか理解しがたいものがある。次に、その点について考えてみたい。

四、巨木による仏像制作に関する検討

『長谷寺縁起文』については、嘉慶二年（一三八八）書写の鎌倉長谷寺本、南北朝時代書写の陽明文庫本が当初の『長谷寺縁起文』の原形を保っていることが、それらの識語を詳細に分析した田島公氏によって指摘されており、[32] いずれにおいても、創建期長谷寺の十一面観音像に用いられた木は長さ十余丈の「楠」とされている。[33] つまり、三十メートル以上の高さのクスノキが用いられたことになる。ここで留意されるのが、クスノキの漢字表記を「楠」としていることである。

クスノキは日本では「楠」とも「樟」とも表記され、樹種として区別されていないが、中国では、同じクスノキ科（樟科・Lauraceae）の樹種であるが、属レベルでは全く異なる樹種として認識されている。中国の分類によると、日本のクスノキ（Cinnamomum camphora (L.) J.Presl）は樟属（Cinnamomum）に含まれ、「香樟」、「芳樟」、「油樟」、「樟木」などと表記される。[34] それに対して楠属（Phoebe）の樹木は日本には自生していない。楠属の樹木の中で、特に中国で高級木材として認識されているのは楠木（Phoebe zennan S.K.Lee & F.N.Wei）で、「楨楠」、「雅楠」とも表記され、湖北省西部、貴州省西北部、四川省に生育している。高大喬木で、木材は香気があり、木目はまっすぐで、構造は細密、変形したり、割れにくく、建築や高級家具等に優良な木材であるとされる。[35]

筆者は令和元年（二〇一九）八月に、中国・四川省雅安市滎経県青龍郷柏香村に所在する雲峰寺において楠木の巨木を見る機会を得た。[36] 同寺は唐時代に創建された古刹で、元時代に軍隊により破壊されたが、明時代に修理が行われ、清時代に継続して建設が行われたという。[37] 同寺の境内やその周辺には、巨大な楠木が林立していた（図

2～7）。境内内の解説によると、古樹や名木の全面的な調査によって登記された楠木は滎経県内に二一八株存在するが、そのうち同寺には一二九株あり、中には樹高三六メートル、幹径一・九九メートル、樹齢が一七〇〇年にも及ぶものがあるという。[38] その多くが、巨大な幹がまっすぐに伸び、仏像の用材としては適切であると思われた。その直立性は、例えば法隆寺の百済観音像の姿を彷彿とさせ、逆に百済観音像は例えば楠木のような用材のもつ直立性がそのまま反映されているのではないかとも思った。いずれにしても、雲峰寺の楠木を見ていると、長谷寺縁起に登場する長さ十余丈の楠も、それをもとに造立された二丈六尺の十一面観音像の存在も、決して荒唐無稽なものではないことが実感されてくる。

また、二丈六尺という規格について、十一面観音の経典では、十一面観音像を造る場合、白檀を用いて一尺三寸の大きさに造るよう規定していることから、[39] 二丈六尺は一尺三寸の倍数に当たるので、長谷寺の十一面観音像は檀像を意識して造られたとする指摘がある。[40] その場合、ビャクダンの代用材として認識されていた柏木[41]ではなくクスノキが用いられていることが問題となってくる。

最近、小原二郎氏によって魏氏桜桃に同定されていた京都・東寺の兜跋毘沙門天立像（中国・唐時代の作例）と京都・清涼寺の釈迦如来立像（中国・北宋時代の作例）の樹種が、再調査の結果、クスノキ科の樹種であることが判明した。[42] しかも、日本に生育するクスノキ（樟）ではないクスノキ科の樹種であり、両像ともに中国の木彫像であることを考慮すると、同定までには至っていないが、楠木である可能性は高いと思われる。[43] 清涼寺の釈迦如来像は東大寺の僧・奝然が北宋の雍熙二年（九八五）に台州で優填王思慕像（優填王が釈迦在世中に白檀で造らせたという釈迦の像）と伝える栴檀釈迦瑞像を、張延皎・張延襲兄弟に模刻させて日本に持ち帰ったものである。[44]『奝然入宋求法巡礼行並瑞像造立記』によると、奝然は現清涼寺の像を造立するために、「香木」を収買（買

収）したという。[45] 場所は台州で現在の浙江省であり、北宋時代において、少なくともこの地域でクスノキ科の樹種も香木として認識されていたことがわかる。中国の漢代に行われた、柏木の黄心部を内側に向けて槨壁をつくり、棺を取り囲んだ木槨墓の方式を「黄腸題湊」と呼んでいるが、揚州に所在する前漢の広陵王劉胥の墓では、同様の方式をとりながら、柏木ではなく楠木が用いられている。[46] この事例によって、漢代においては、楠木は柏木の代用可能な木材して認識されていたことが知られる。この認識が後世まで及んでいたとすると、白檀の代用材として、柏木のみならず楠木も認識されていた可能性は高く、長谷寺の十一面観音像が檀像として認識されていたことは十分にあり得ると思われる。つまり、同像が、「楠」で二丈六尺という規格で造立されたことには深い意味が込められていることが理解されるのである。[47]

『長谷寺縁起文』によると、十一面観音像の造立に当たり、御衣木加持を行ったのは道慈であることが知られ、用材を含めた中国の木彫像に対する理解は道慈によってもたらされた可能性も考慮される。

おわりに

以上、創建期長谷寺の十一面観音像について、その実在性、史実性を中心に検討を加えてみた。その結果、八世紀前半に長谷寺において、二丈六尺規模の巨大な木彫像が造立されて存在していた可能性はかなり高まったといえる。その場合、その制作意図や十一面観音像として造立された意味が問題となってくるが、縁起の内容を検討すると、天武天皇の皇統の維持と安泰を願う皇族及び藤原氏によって造立されたという制作背景の輪郭が浮か

び上がってくるように思われる。そして十一面観音像として造られた意味としては、同像のもつ護国的な性格が特に期待されたと考えられる。

このように見てくると、創建期長谷寺の十一面観音像は日本彫刻史上きわめて重要な存在として浮かび上がってくるように思われる。縁起に語られる説話的な内容を離れて、歴史的に実在した像として、日本彫刻史上の意義を、多角的な観点から検討していくことが必要と思われる。本稿ではその段階には至っていないが、現時点で思い浮かぶいくつかの課題について摘記して本稿の締め括りとしたい。

まず、現在の長谷寺の十一面観音像が安置されている本堂は懸造りの構造を示すが、その立地が修二会で十一面観音悔過が行われる東大寺二月堂[48]と共通する点である。長谷寺の十一面観音像に天武系皇族の関与を想定した場合、天武天皇の皇統を継ぐ聖武天皇と関係が強い東大寺に所在する二月堂との共通性は看過できないように思われる。[49] さらに中国までに視野を及ぼすと、天龍山石窟の第九窟は唐時代に造営されたが、上屋に総高七・五五メートルの弥勒仏倚像、下屋に総高五・五メートルの十一面観音立像を配しているが、[50] 窟の前方下方は崖状になっており、長谷寺や二月堂と似た立地となっていることも留意される。

長谷寺の十一面観音像の当初像の像容については、像高が二丈六尺である以外不詳であるが、その大きさからもある規範性をもっていたと考えられる。創建から最初に焼失する天慶七年（九四四）までに造立されたと考えられる十一面観音像の現存作例の中には、当初像の面影を伝える像が少なからず存在している可能性はある。筆者は以前、大安寺の十一面観音像にその可能性を指摘したことがあるが、[51] さらに検討してみたいと考えている。

本稿の考察により、当初像の造立には天武天皇との関係が指摘できたといえる。長谷寺にはやはり天武天皇との関係が深いと考えられる銅板法華説相図が伝来している。[52] これまで、銅板法華説相図と十一面観音像の造立を

結び付けて考えられたことはなかったが、両者を含めて、長谷寺の歴史を総合的に検討していく必要があると思われる。

〔註〕

（1）『扶桑略記』神亀四年（七二七）丁卯三月三十日庚午条（国史大系）

供養大和国城上郡長谷寺。請僧六十口。行基菩薩為導師。義暹法師為呪願。一云。呪願玄昉僧正。夫件寺者。弘福寺僧道明。俗姓六人部氏。幷沙弥徳道。播磨国揖宝郡人辛矢田部氏。二人相共所建立也。其仏木者。自近江国高嶋郡三尾前山。流出霹靂木也。所至之処。有疾疫災。随人漂流。遂至大和国葛木郡神河浦。爰沙弥道明。沙弥徳道。控引此木。企造仏思。有志無力。専勤礼拝。於是。正三位行中務卿兼中衛大将藤原朝臣房前。奏聞公家。依勅。下行大倭国稲三千束。因茲奉造十一面観世音菩薩像一体。高二丈六尺。雷公降臨。破作方八尺盤石。令為其座矣。仏師稽主勲。稽文会両人之作。〈已上縁起文。〉

為憲記云。長谷寺仏木。元者。昔辛酉年（推古九）。洪水之時。自近江国高嶋郡三尾崎流出橋木也。所至之処。火災病死。卜筮所告。此木祟也者。于時大和国葛木下郡住人出雲大満。来行此国。伝聞此木凶霊之由。心中発願。吾以此木奉造十一面観音像。聊儲少粮。雇求人夫。然木大人少。徒見欲返。試付綱曳来。軽如走。見人奇駭。上下合力。遂至大和国城下郡当麻郷。只有発願之心。全無造仏之力。然間大満即世矣。霊木空歴八十余年。其郡其里。疾病盛発。村人同心。曳棄於長谷川之上。又経三十年。爰沙弥徳道。有造仏之志。養老四年。移置峯上。徳道無力。悲泣積年。朝暮向木。礼拝流涙。於是。藤原朝臣房前大臣。俄蒙綸旨。下行造料。仍神亀四年。造畢高二丈六尺十一面観音像。徳道夢見神人告言。此北峯在大巌矣。掘顕奉立此像。覚後昇見。有方八尺大石。面平如掌。〈出天平五年徳道記縁起等文。〉

＊史料の引用に当たり、旧字は新字に改めた。〈　〉内は割注、（　）内は傍注を示す。以下同様。

（2）焼失及び再興の記録については、『長谷寺編年資料』（長谷寺　昭和四十九年〈一九七四〉五月）参照。

（3）岩佐光晴「仏師稽文会・稽主勲をめぐって」（『日本美術史の杜』竹林舎　平成二十年〈二〇〇八〉九月）

（4）『三宝絵』下巻二十「長谷寺菩薩戒」（岩波・新日本古典文学大系）

昔、辛酉歳ニ大水イデ、大ナル木流出タリ。近江国高嶋郡ノミヲガ崎ニヨレリ。サトノ人ソノハシヲ切トレリ。スナハチソノ家ヤケヌ。又ソノ家ヨリハジメテ、村里ニシヌル者ヲホカリ。家〻祟ヲウラナハスルニ、「コノ木ノナス所ナリ」トイヘリ。コレニヨリテ、アリトシアル人近付ヨラズ。

此時ハ、大和国ノ葛城ノ下郡ニスム、イヅモノ大ミヅトイフ人此里ニ来レリ。此木ヲキ、テ、心ノ中ニ願ヲオコス。「願ハ此木ヲモチテ、十一面観音ニツクリタテマツラム」ト。シカレドモ、ユクベキタヨリナクシテ、空クモトノ里ニ帰ヌ。コノ、チ、大ミヅガタメニシバ〳〵シメスコトアルニヨリテ、糧ヲマウケ、人ヲ伴ヒテ、又彼木ノモトニイタリヌ。木オホキニ、人トモシクシテ、イタヅラニ見テカヘリナムトス。心ミニ綱ヲツケテ引動スニ、カロクヒカレテヨクユク。道ニアフ人ミナアヤシビテ、車ヲトヾメ、馬ヨリヲリテ、力ヲクハヘテ共ニヒク。ツヒニ大和国葛城ノ下郡当麻ノ里ニ至リヌ。物ナクシテ久クヲキテ、大ミヅ已ニ死ヌ。

此木イタヅラニナリテ八十年ヲヘヌ。ソノ里ニ病オコリテ、カラクコゾリテヤミイタム。「此木ノスルナリ」トイヒテ、郡ノツカサ、里ノヲサラ、大ミヅガ子ミヤ丸ヲメシテ勘レドモ、ミヤ丸ヒトリシテコノ木ヲサケガタシ。郡里ノ人トモニシテ、戊辰歳ニ、シキノ上ノ長谷河ノ中ニ引ステツ。ソコニシテ三十年ヲヘヌ。

コヽニ沙弥徳道トイフ者アリ。此事ヲキヽテ思ハク、「此木カナラズシルシアラム。十一面観音ニツクリタテマツラム」ト思テ、養老四年ニ、今ノ長谷寺ノミネニウツシツ。徳道力無シテ、トクツクリガタシ。カナシビナゲキテ、七八年ガ間、此木ニ向テ「礼拝威力、自然造仏」トイヒテ額ヲツク。飯高ノ天皇ハカラザルニ恩ヲタレ、房前ノ大臣自ラ力ヲクハフ。神亀四年ニツクリ終ヘタテマツレリ。タカサ二丈六尺ナリ。徳道ガユメニ神アリテ、北ノミネヲサシテイハク、

カシコノ土ノシタニ大ナルイハホアリ。アラハシテ此観音ヲ立タテマツレ。
トイフトミル。サメテ後ニ掘レバ有リ。弘サ長サヒトシク八尺ナリ。面平カナル事、タナ心ノゴトシ。
ソレニ立タテマツレリ。徳道、〃明等ガ天平五年ニシルセル、観音ノ縁起幷ニ雑記等ニ見ヘタリ。（後略）

（5）『日本紀略』天慶七年（九四四）正月九日条（国史大系）
大和国豊山寺〈長谷寺也。〉堂舎皆悉焼亡。験仏同焼失。建立之後二百廿四年。

（6）『興福寺略年代記』（続群書類従）には天慶九年（九四六）のこととして「長谷寺再興。」とある。

（7）『春記』永承七年（一〇五二）八月二十八日条（史料大成）
（前略）今日真範僧正参入。督殿申云、長谷寺已以焼亡了、只今自彼寺告来、□（真カ）範彼寺別当也、今有此事太悲、古昔焼亡云、不能取出、只取出御頭〈十一面也〉、作継御身焼亡之後百余年云々、霊験所第一也、末法之最年有此事、可恐之、但仏取出事無一定云々、

（8）『春記』永承七年（一〇五二）九月七日（史料大成）
今日山科寺別当真範僧正奉昇殿之書云、長谷寺事拝見涙難抑候前度焼亡只御面一□以彼塔仏身造立、此度左辺怨怒相一面、右辺目牙相一面、頂上仏面一面、合三面残、御足人不奉取出、灰中所存給也、皆金色也、為火不損侍、末法事希有事侍、焼亡以後遠近人参詣如雲、某宿報可恥申、年老頻罷遇於此罪、定措身無処、不日堂一欲建立□心云々、此書昨日書也、或説云、此寺有本寺、号長谷寺、至于此観音堂号豊山寺、養老五年長谷寺僧道明等建立、大仏師警文会云云、其後天慶七年正月日夜焼亡、只取出御頭一云々、其度焼亡諸廊堂塔皆悉焼亡、只二王堂一宇残云々、此間本所傍作仮屋、安置御頭三面、皆垂帷帳、人不能見之云々、衆人参入奉御灯明云々、件火自若狭国参入下人暁食間火焼茨、其撲滅已了云々、而風又吹上、小焔付僧房、其火付廊、仍参御堂之人已以不通、御堂焼亡之間相構取出御頭云々、

（9）『百錬抄』天喜二年（一〇五四）八月十一日条（国史大系）に「供養長谷寺。」とある。

（10）『美術研究』第一二八号（昭和十八年〈一九四三〉一月）に公刊されている。当該箇所は以下の通り。

（前略）即十一面観音如旧高二丈六尺以本仏頂上小面等奉納御身中（後略）

なお、同書によるとこの時の再興造像を担当した仏師を「摂津国講師」と記している。この時期にこれだけの巨像を制作できた仏師としては定朝がまず筆頭にあげられる。しかし、定朝はこの時点で法眼位にあるので、「摂津国講師」とある仏師には当たらないといえるが、定朝の弟子が担当した可能性は高いと思われる。

（11）『続日本紀』神護景雲二年（七六八）十月二十日条（岩波・新日本古典文学大系）

幸長谷寺、捨田八町。

（12）出雲路修「解説」（『日本霊異記』新日本古典文学大系30　岩波書店　平成八年〈一九九六〉十二月）

（13）『日本霊異記』下巻「沙門憑願十一面観世音像得現報縁第三」（岩波・新日本古典文学大系）

沙門弁宗者、大安寺之僧也、天年有弁、白堂為宗、多知檀越、高得衆気、帝姫阿倍天皇代、弁宗受用于其寺大修多羅供銭卅貫、不得償納、維那僧等、徴銭而逼、償債無便、故登於泊瀬上山寺、参向十一面観音菩薩、々々々之手、縄繋引之、而白之言、我用大安寺修多羅宗分銭、而償無便、願我施銭、称名以願求、於是維那等、来徴之猶逼、答言暫待、我於菩薩、白銭将償、敢久不延、于時船親王、有善縁、参至其山寺、備法事而行、弁宗法師、繋像引縄、猶白之曰、銭速賜我、徴銭速償、親王聞之、問弟子言、以何因縁、今斯禅師、如是白耶、弟子答之、如上具述、親王聞状、出銭償寺、方知、観音大悲、法師深信矣。

（14）『続日本後紀』承和十四年（八四七）十二月二十一日条（国史大系）

勅。大和国城上郡長谷山寺。高市郡壺坂山寺。元来霊験之蘭若也。宜付所由。編為定額。永以官長令撿校也。

（15）長谷寺縁起に関する検討は以前に拙論（註3）で行ったことがあるが、論の展開上、再説しておきたい。

（16）原文は註4に掲載。

なお、原文の「ミヲガ崎」、「イヅモノ大ミツ」は『扶桑略記』所引の『為憲記』では「三尾崎」、「出雲大満」と記し、前田家尊経閣本『三宝絵』では「三緒崎」、「(出) 雲大水」と記す。ここでは前者の表記に従う。また、「ミヤ丸」については前田家尊経閣本の「宮丸」の表記に従った。

(17) 原文は註1に掲載。

(18) 日本における十一面観音の信仰は、那智山経塚出土の金銅仏や法隆寺金堂壁画などから、七世紀末頃から始まると考えるのが妥当と思われる。

(19) 原文は註1に掲載。

(20) 『長谷寺縁起文』成立に関するこれまでの諸説については以下の文献にまとめられている。
田島公「陽明文庫所蔵『長谷寺縁起文』の解題と翻刻—鎌倉長谷寺本と比較検討を中心に—」(『禁裏・公家文庫研究』第六輯　思文閣出版　平成二十九年〈二〇一七〉八月)

(21) 永井義憲「長谷信仰」(『岩波講座　日本文学と仏教　第七巻　霊地』岩波書店　平成七年〈一九九五〉一月)

(22) 壬申の乱の概要については以下の文献を参照した。
佐藤信「壬申の乱」(『日本歴史大事典2 (こ～て)』項目解説　小学館　平成十二年〈二〇〇〇〉十月)

(23) 『日本書紀』天武天皇元年(六七二)七月四日(岩波・日本古典文学大系)
是日、将軍吹負、為近江所敗、以特率一二騎走之。逮于墨坂、遇逢兎軍至。更還屯金綱井、而招聚散卒。於是、聞近江軍至自大坂道、而将軍引軍如西、到当麻衢、与壱伎史韓国軍、戦葦池側。(後略)

(24) 『日本書紀』天武天皇元年(六七二)七月二十二日条(岩波・日本古典文学大系)
是日、羽田公矢国・出雲臣狛、合共攻三尾城降之。
なお、三尾は古来杣として知られていたこと、奈良時代には東大寺建立のために高島山作所が設置されたことが指摘されている。

瀬田勝哉『木の語る中世』（朝日選書六六四　朝日新聞社　平成十二年〈二〇〇〇〉十一月）
また、この地域は現在でも林業が盛んで、「朽木」という地名も残っており、本縁起との関連で興味深い。

(25)『続日本紀』養老四年（七二〇）八月三日条（岩波・新日本古典文学大系）
是日、右大臣正二位藤原朝臣不比等薨。帝深悼惜焉。為之廃朝、挙哀内寝、特有優勅。吊賻之礼異于群臣。大臣、近江朝内大臣大織冠鎌足之第二子也。

(26)『続日本紀』神亀四年（七二七）閏九月二十九日条（岩波・新日本古典文学大系）
皇子誕生焉。

『続日本紀』神亀四年（七二七）十一月二日条（岩波・新日本古典文学大系）
（前略）詔曰、朕頼神祇之祐、蒙宗廟之霊、久有神器、新誕皇子。宜立為皇太子。布告百官、咸令知聞。

(27) 光明皇后が聖武天皇遺愛の品を東大寺に献納した際の目録である『東大寺献物帳』に収録される「黒作懸佩刀一口」は、天武天皇の第一皇子である草壁皇子が藤原不比等に賜ったもので、それを文武天皇が即位した時に不比等が献上し、文武天皇が崩御した時に、再度不比等に下賜され、不比等が薨去した時に、当時皇太子であった聖武天皇に献上したと伝えられ、天武天皇から草壁皇子を経た皇統の維持を象徴するものといえる。

(28) 石上英一「コスモロジー—東大寺大仏造立と世界の具現」（『列島の古代史　ひと・もの・こと　7　信仰と世界観』　岩波書店　平成十八年〈二〇〇六〉五月）

(29) 喜田貞吉「長谷寺縁起を論じて諸寺縁起集の年代に及ぶ」（『仏教史学』第三編第一二号　大正三年〈一九一四〉三月）

(30) 田島公「古代史史料として分析した「長谷寺観音造立縁起」—未翻刻史料の紹介と神亀六年三月太政官符の検討を中心に」（『『古事談』を読み解く』　笠間書院　平成二十年〈二〇〇八〉七月）

(31) 顔娟英（肥田路美訳）「唐代における十一面観音の図像と信仰」（『アジア仏教美術論集　東アジアⅡ　隋・唐』 中央公論美術出版　平成三十一年〈二〇一九〉三月）

(32) 田島公氏前掲論文（註20と同）
鎌倉長谷寺本については以下の文献に翻刻されている。
内山侑子「鎌倉長谷寺所蔵『長谷寺縁起文』について」（『鎌倉』第一一七号　平成二十六年〈二〇一四〉八月）

(33) 大日本仏教全書所収の『長谷寺縁起文』にも同様の記載が見られる。

(34) 李錫文編『中国植物志』第三一巻（科学出版社・北京　一九八二年九月）

(35) 李錫文氏前掲書（註34と同）

(36) その概要については以下の文献にすでに紹介している。
能城修一・岩佐光晴・藤井智之「巻頭写真　日本の古代の木彫像に使われた楠と樟」（『植生史研究』第二八巻第一号　令和元年〈二〇一九〉九月）

(37) 寺内の解説板に「雲峰寺簡介」として以下のように記されている。
（前略）這座絶嚣世外的千年梵刹、始創于唐、兵毀于元、重修于明、続建于清、寺内両棵〝楠王〟見証了雲峰寺的千年歴史。（後略）
＊中国語の引用に関し、簡体字は常用漢字に改めた。以下同様。

(38) 寺院内の解説板に「滎経県古樹名木簡介」として以下のようにある。
（前略）根据滎経県二〇一七年古樹名木資源普査登記結果、全県現有登記建档古樹名木三五二株（中略）、楠二一八株（後略）
また同様に「雲峰寺古楠群及〝中国楠王〟簡介」として、以下のようにある。
（前略）雲峰寺内登記造冊的古楠有一二九株、樹齢均在百年以上、是迄今為止全国保存最完整的古楠群、十分珍貴。（中略）古樹中又以位于雲峰寺内的楠王最為珍貴、樹高三六米、胸径一・九九米、

樹齢一七〇〇年、栽種于西晋。（後略）

＊解説板は横書きであるため、数字は算用数字で表記されているが、ここでは漢数字に改めた。

（39）耶舎崛多訳『仏説十一面観世音神呪経』、阿地瞿多訳『十一面観世音神呪経』では「一尺三寸」とし、玄奘訳『十一面神呪心経』では「一搩手半」とする。「一搩手半」はほぼ「一尺三寸」と同数と考えられる。

（40）奥健夫「木彫像の成立」（『日本美術館』　小学館　平成九年〈一九九七〉十一月）

（41）ビャクダンの代用材としての「柏木」の考えは、玄奘訳『十一面神呪心経』の注釈書として慧沼によって書かれた『十一面神呪心経義疏』に示されている。「柏木」は中国ではヒノキ科の樹木、日本ではカヤに当てられている。このことについては以下の文献で述べている。

①金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之「日本古代における木彫像の樹種と用材観―七・八世紀を中心に―」（『ＭＵＳＥＵＭ』第五五五号　平成十年〈一九九八〉八月）

②金子啓明・岩佐光晴・藤井智之・能城修一・安部久『仏像の樹種から考える古代一木彫像の謎』（東京美術　平成二十七年〈二〇一五〉十二月）

（42）能城修一・安部久「「小原二郎氏旧蔵木彫像用材調査標本」の樹種」（『ＭＵＳＥＵＭ』六七九号　平成三十一年〈二〇一九〉四月）

（43）顕微鏡による細胞組織の観察で、樹種を楠木であることを同定するのは現状難しいといわれている。以上は、藤井智之氏のご教示による。

（44）毛利久・丸尾彰三郎「釈迦如来像」（『日本彫刻史基礎資料集成　平安時代　造像銘記篇一』中央公論美術出版　昭和四十一年〈一九六六〉六月）

（45）前掲解説（註44と同）所収史料による。

（46）岩佐光晴「クスノキ製木彫像をめぐって」（『ＭＵＳＥＵＭ』六七九号　平成三十一年〈二〇一九〉四月）

(47) ただし、長谷寺の当初像が日本に自生しない楠木を用いていたとは考えにくく、楠木に見合う巨大な樟が用いられたと思われる。

(48) 伊藤延男「二月堂」(『奈良六大寺大観第九巻　東大寺一』　岩波書店　昭和四十五年〈一九七〇〉四月)

(49) 東大寺二月堂の修二会は、天平勝宝四年(七五二)に実忠が創始したといわれるが、その実態については不明な点が多い。しかし、十一面観音を本尊とする悔過会が八世紀半ばには成立していたことは間違いないと考えられている。天平勝宝四年は大仏開眼供養が行われた年でもあり、国家的な法会として認識されていた可能性は高いと思われる。その成立に当たって、すでに存在していた長谷寺の像が何らかの形で認識されていたことは想定してもよいのではなかろうか。東大寺二月堂の修二会については以下の文献を参照した。

佐藤道子『東大寺　お水取り　春を待つ祈りと懺悔の法会』(朝日選書八五二　朝日新聞出版　平成二十一年〈二〇〇九〉二月)

(50) 連穎俊編『天龍山石窟芸術』(北京・外文出版社　二〇一二年)

(51) 前掲拙稿(註3と同)

(52) 銅板法華説相図については、制作時代や銘文に記された天皇を誰に当てるかで諸説があり、定説を見ていない。そうした中で、近年、田中健一氏は、本銅板の制作背景として持統・文武朝以降、天武天皇に対する崇敬が高まり、その正統性を確立しようとする意図があったことを指摘しており、注目される。

また、三田覚之氏は、長谷寺の創建とは切り離して考えられる傾向にある銅板法華説相図に対して、もともと長谷寺のある場所に存在していた可能性があることを指摘している。

①田中健一「長谷寺銅板法華説相図の図様及び銘文に関する考察」(『美術史』第一六八冊　平成二十二年〈二〇一〇〉三月)

②三田覚之「長谷寺　千仏多宝仏考」（『古代寺院の芸術世界〈古代文学と隣接諸学6〉』竹林舎　令和元年〈二〇一九〉五月）

〔図版出典〕

図1　長谷寺提供
図2～4　筆者撮影
図5　小澤正人氏撮影
図6・7　筆者撮影

〔付記〕

本稿をなすにあたり、写真の提供とその掲載のご許可をいただいた長谷寺当局に感謝の意を表します。
本稿は、平成二十九年度・三十年度成城大学特別研究助成「造像説話における史実性をめぐる基礎的調査研究」による研究成果の一部である。また、平成二十四年度・二十五年度出光文化福祉財団調査・研究補助事業助成「創建期長谷寺の十一面観音像に関する基礎的調査研究」（研究代表者　岩佐光晴）及び令和元年度科学研究費基盤研究（B）「東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究」（研究代表者　岩佐光晴）による研究成果の一部も反映されている。

図１　重要文化財　木造十一面観音菩薩立像　運宗作
室町時代・天文７年（1538）　像高　1018.0 cm　奈良・長谷寺

図２　雲峰寺正面

図３　雲峰寺入口

図４　雲峰寺境内　左右の巨木が楠木の古樹

図５　雲峰寺境内　楠木の古樹

図６　雲峰寺境内　林立する楠木

図７　雲峰寺の外周の楠木